

# David Copperfield: Mr. Micawber の意味

西 條 隆 雄

## 1. 運命の皮肉

とび色の外套を着、黒いタイツに黒靴をはき、肥り気味で中年、頭は卵のごとくつるつるに禿げ、てらてらと光っている。服そのものはみすぼらしいが、シャツの襟はおそろしく堂々としており、手に持つステッキは、色あせてこそいるもののすばらしい房飾りのついた代物である。いかにも紳士であるといわぬばかりのいでたち、立ち振舞いをみせる、この Micawber 氏は、名代の楽道家にして喜劇人物、高名なる美文家にして貧苦の中をのたうつ万年失業者である。一見みすぼらしくみえて、実に複雑で豊饒なるこの人物は、なかなか読者の掌中におさまらない。

Micawber 夫人によると、主人の才能は「並々ならぬもの」であるが、その当人は才能を発揮すべき場所がないのか、職業を転々とかえる。もとは海兵隊士官であつたらしいが (11)、ついで委託注文とりとなり (11)、プリスマの税関でつとめ (17)、メドウェイ川で石炭販売に従事し (17)、2 週間で 2 シリング 9 ペンスにしかならぬ穀物の委託販売をはじめ (27)、次には Heep の法律事務所につとめる (39)。ところが私達読者には、Heep の事務所につとめた以外は、彼が上に列挙した職業に実際に就いたことすら定かでない。彼が生計のために働いている姿は、作品中その片鱗すらうかがうことができない。一体なぜであろうか。「彼のような腕のある人間」(17)を、運命はただにもて遊んでいるだけなのか。あるいは、別の目的のために彼を試しているのか。それとも、彼の才能などは夫人の虚言にすぎず、実際は無責任な空

想家、大言壮語する無能者以外の何者でもないのであろうか。

確かに、有用性で判断する限りMicawber氏に勝ち目はない。職業、収入ともに不安定、子供は次々に生まれてくる。借用書については、「裏づけがある」というのが口ぐせであるが(28)、実際には支払うあてもないのに、これを濫発する。債務者獄と娑婆をひっきりなしに往復する。子供の教育はおろそかにして、一人よがりの判断と言葉の文に、悦に入っている。

しかし、一旦自分のこと、家族のことを離れて、他人のために働く段になると、彼は別人になりかわり、実にすばらしい働きをするのである。その典型例——といっても、作品中、彼の行動はすべて典型とよぶ以外に適語はないが——は、債務者獄にあって、下院に対し破産者拘置法改正の請願書を作成する場面(11)であろう。

妻子には胸はりさける生活を残し、「太陽は沈んだ。二度と我に太陽の光が届くことはなかろう」と言いつつ、悄然としてKing's Bench Prisonに入った彼であるが、入獄した日の午後にはもう九柱戯に熱をあげ、獄内では「紳士」扱いをうけ、たちまち上席におさまっている。かわり身の早さ、一極端から他の極端へ急転できる性格は、常人には例をみぬもので、これが滑稽なほどに彼の魅力を形成する資質の一つとなっている。その彼が、獄内の人に法改正の請願文起草を提案するのである。もちろん、彼の弁説に抗うことのできる人などいるはずもない。彼は満場一致の支持をうける。

「自分のことは何もしないが、そのほかのことなら実によく働く。自分のためには一文にもならぬことにさえ、嬉々として働く」彼は、早速文案を作り、清書し、全員を集めて仰々しい署名の儀式をとり行う。同僚のHopkins大尉が、飴玉をころがすように読み上げる一字一句にじっと聞き入り、「起草者の虚栄」にひたりきっている。

惜しいかな、全文を目にすることはできず、私達読者はわずかに、「国民の選良、国会に相集りて」とか、「われら請願者この榮譽ある下院の前に、伏して願わくば」といった断片から、推量するしかないが、のちに出てくる

数々の手紙をみても、これがすばらしい文語調の請願書であろうことは間違いないであろう。文才に秀で、「想像力豊か」で、「雄大・高邁な表現」(39)に訴える、すぐれた資質を彼は有しているのである。

ところが、現実社会において、彼ほどみじめな人間はいない。貧苦また貧苦とのはてしない闘いに明け暮れている。債務者獄を出ることが決まった時、獄内では誰も彼もが興奮して彼を祝うのであるが、本人だけはしょげかえり、まるで難破したような気持ちに沈みきっている。他の人にとっては、自由こそはいかなる代償を払ってでも求めるに値するものであるが、彼の場合は逆であって、娑婆は債鬼との戦いがあるばかりだ。

いくら運命の嘲弄を嘆いても、彼のくらしむきは好転しない。逆に、ますます悪化して、料金未払いで水道が止まる、家具調度は差押えとなる、ロンドン立退きの止むなきとなる、はては狡猾な Heep から前借りをしつゝ事務所つとめをする、といったどん底生活を強いられる。

ところが、こんな苦しみのさ中にありながら、彼の楽天性は微動だにゆるがない。“Something will turn up.”を固く信じ、これを口にし、瞬時なりといえども、バラ色の未来を夢みて得々としているのである。彼の本領は、どうやら債権者、執達吏に追いまわされたり、投獄の身にあつてこそ発揮されるらしい。自由とはうらはらに、債務に拘束され、貧苦にあえぐ境遇にあつてこそ、楽天性はますます強まり、驚嘆するほどのすばらしい修辞がこんこんと湧き出てくるのだ。

彼が己れの不遇・災難を嘆くとき、比喩は一際生彩を放つ。太陽、海、地平線という壮大な比喩を援用して、苦難が表現される。万事が休止、希望が消えた時は、まるで全世界から光が消えたかの感すら覚えさせる。“The God of day had now gone down upon [me]” (11), “hope has sunk beneath the horizon” (28). そして、己れの身は “a foundered Bark” (49), “a straw upon the surface of the deep” (49) であり “a Waif and Stray upon the shore of human nature” (52) と、いともはかなきものとなる。また、己れを

牢獄にたとえ、“one gleam of day might...penetrate into the cheerless dungeon of his remaining existence” (17) とも表現している。破滅し、よるべのない身となれば、“Hiding the ravage of care with a sickly mask of mirth...” (17) と、零落の憂いを憎いほど巧みに表現する。

Micawber 氏は、どうみても人生、それもうらぶれた人生を、詩的に語る文人である。身にふりかゝる災難・苦難を、心にくいいるばかりに表現しては、その巧みに我を忘れて恍惚となり、しかして災難・苦難が脳裏から跡かたもなく消え去ってゆく、不思議な人物である。

文人ばかりではない。彼は Bernard N. Schilling<sup>2</sup> の指摘するように、俳優でもある。悲しみの極からよろこびの極へ、一気にかけのぼることができもすれば、剃刀の効用に訴えて債権者を追い返すこともできる。窮すればこそ、Micawber 氏は名句を発し、修辞には一際力がこもり、そして絶対絶命のピンチは大俳優の舞台まわりで切りぬける。Shakespeare 学者である Alfred B. Harbage の指摘は至言であろう。

As Falstaff loves to play Falstaff, so Micawber loves to play Micawber, and his woes give him a chance to compose for himself some magnificent lines.<sup>3</sup>

文人であり、俳優であり、生粋の楽道家である Micawber 氏は、単なる喜劇人物にすぎないのか、それとも、もう少し大きな意味をもっているのか、彼の性格と作品中における役割をいま一度考えてみたいと思うのである。

## 2. Micawber 氏の性格

Micawber 氏の性格の根本的特徴は、初登場の場面に如実にあらわれている。いかにも紳士らしい身だしなみをしてはいるが、外套は色あせており、ステッキの房飾りこそ堂々としてはいるが、これまた色はあせているのである。虚勢と実際のみすばらしい姿の間に大きな隔りがあり、この隔りこそ、彼の行動に、考え方に、そして言語表現に、特徴的な性格を与えている

ようである。

彼が、わずか10才かそこらの David に語りかける時、声は“condescending” (11) となり、響きは朗々としたもので、態度はいたって“gentcel”である。David を“sir” 扱いし、年令の相違など眼中になく、難解な語、もってまわったいい方、古風な比喩を用いて、一挙に己れの修辞世界を展開する。だが、突如現実の用件にたちもどると急転直下、「にっこりし、ひどく打ちとけた様子で」、貸間、住所、そして道案内のことを口にする。

誇張され、修辞で飾られ、美文調となり、表現に窮するところまで飛び上ると、“in short” という句と共に語勢漸落、さもしく恥ずかしい現実にまい降りる。抽象と言葉の遊びから具象へ、婉曲と比喩から直截へ、ラテン語多音節語の朗々たる列挙からゲルマン系単音節語の平明さへと、とたんに移行するのである。文は人なりという如く、ここに Micawber 氏の、恥ずかしい現実世界と、把えようとして把えきれぬ願望世界の間を往き来する生き方が、如実にあらわれているといえるであろう。

修辞世界こそは Micawber 氏の最も得意とする活動圏であって、これは彼をきもしい現実から解放する大きな力となっている。しかし、修辞世界とはいっても、Pecksniff の如き、聖句であれ箴言であれ、己れの利益のためにこれを自在にねじまげて、何一つ心のいたみを覚えぬ巧言令色とは一線を画する。Micawber 氏の修辞を支える基盤は、夫として、父として、人間として、愛すべき資質から成り立っている。嫌悪・軽蔑はみじんも伴わないのである。

そうした彼の性格を列挙すれば、まず几帳面さをあげることができよう。人から借りたお金はきちんと手帳に記載し、いつ何時といえど、復利計算により現在借金総額を算出できるよう準備万端おこたりない。たとえ David からであろうと、借りれば「Mrs. Micawber からもらうようにと、支払い命令書」(11)を書いて渡している。借金癖が彼のなきどころで、支払い能力をいい出せば、彼の善良な資質がすべて帳消しになりかねないが、ともかく、

借金に対するこの几帳面さと、約束手形を作る時のうれしそうな様子、加えて、出来上った時には、まるで画家が自分の傑作をながめるごとく大事そうに眺めやる様子は、詐欺だとか芝居だとかいう以前の、もっと本源的な人間の善性をあらわしているといえるであろう。

だからこそ、Traddles から借金した時には、次のように言って、己れの言葉に感動しきっているのは、万が一にも違うことのないことを期したさわやかさと、束縛からの自由によるのである。「…したがってただ今、41ポンド10シリング11ペンス半に対する借用証書を Traddles 君にお渡しいたしますが、これによって我輩の道義的威信も回復し、ふたたび昂然として人中を闊歩できますことは、我輩として欣快のいたりであります！」(36) 何という天真爛漫さであろう。

几帳面であると同時に、友情においても彼は篤い。大架装なのは一貫してみられる特徴としても、年令などは不問であって、David が訪ねてきた時に「わしの旧友、わが青春の日の友」(27) と大音をあげる。この言葉を聞いた Micawber 夫人は、すわ救世主の出現とばかりありったけの装いをこらして迎えに出るが、事実を知ってガックリ倒れる。が、こんな姿を尻目に、彼は心暖まる歓迎を示し、更に夕飯すらたべてゆけとすすめる。夫人を一目みれば、一家の事情もわかろうものを、我家のあえぐような窮状など友情の前には一顧だにしない。

妻子に対しては、愛情深くかつ献身的である。だからこそ夫人は忘れようにも忘れることのできぬ夫婦愛の根本原理 “I will never desert Mr. Micawber” を、くり返しのべるのである。借金苦ゆえにプリマス行に追いやられたり(12)、料金未払いで給水止めになったり(28)、Heep の掌中において魂の自由を失いかけた頃(49)など、確かに結婚したことにぐちの一つもこぼし、妻子にハツ当りし、妻の実家の人々を悪党呼ばわりもしている。しかしそれ以外では、互いを信頼し、いたわりあい、Micawber 氏が妻を “guide, philosopher and friend” (17; Pope, *Essay on Man*) だとのべ、

「家庭を高め神聖化する力」(28), つまり妻の力を賞揚すれば, 夫人もまた「妻の道だけはふみはずすまい」(36)と固く誓っている。

そして生の享楽。食べることと飲むこと, 親しい人と語り、手紙を書くことに, 彼以上に喜びを感じる人間を見出すことができようか。とりわけポンチ酒を作ることにかけては, 自分がいかに癡りきった気持に沈んでいようとも、次の瞬間には全く上気嫌で酒作りにいそしむのが Micawber 氏である。「まるで子々孫々の末までもつづく、一家の財産をつくり出している」(28)のような、晴ればれとした気分にはたっている。

Heep の奸譎と虚偽のどろ沼に入って身動きがとれなくなった時、彼の真髓は最も劇的な試練にさらされる。耐え難きを忍びに忍んだあげく、ついには「本当の Micawber をかえしてくれ」(49), と絶叫する。彼は、悪魔には決して魂を売り渡さぬことを、身にしばるようにして言明する。いかに窮乏していようと、いかに苦しめられていようと、彼は魂の自由、人間の本源的な希求をすて去るような人間ではないのだ。実に頼もしく、心引かれる人物ではないか。

以上のすぐれた資質に加えて、Micawber 氏の名を永遠に刻む、文才をあげておかねばなるまい。口を開けば格言がとび出し、引用ときは、聖書、ギリシャ・ローマ神話にはじまり、Chaucer, Shakespeare, Addison, Burns, Gray, Johnson, Pope, Byron を、幅広く引く。“in status quo” (49), “in esse...in posse” (49), “(D.V.)” (49; ‘God willing’) といったラテン句を口にしては、得意のあまり頬をゆるめ、難解、晦渋な語、ラテン語派生の抽象語、更には響きのいい表現を読み上げる時など、「頭をふって惚れ惚れと」ながめ入る。自分の筆となる手紙とはいえ、その中に見事な引用句を見つけた時は「どこまで読んだか忘れたなどという口実をもうけて、わざわざそこをもう一度読む」(52) のである。

この、言葉と表現に対する純粹なよろこびは、Micawber 氏の性格の中で一際光っている。語れば即座に修辞の恍惚境にひたり、書けばこれは長文の

手紙、しかも一気呵成に書き上げる。彼には「いい気持になって長い手紙を書きたがる驚くべき癖」(49)があり、Trotwood 伯母さんも、「あの人はね、たとえ犯罪になろうからといって、手紙となれば、たちまち大東で一本くらはいは書いてしまうんだから」(52)と語っている。「夢まで手紙でみる」Trotwood, 54)といわれる Micawber 氏は、その手紙の中で晦渋・難解なことばを愛用し、太陽・海・嵐・難破などの壮大な比喩を巧みに使い、古典の引用をちりばめて、よろこび、悲しみ、怒り、苦しみを、まさにほれほれとするほどに書き上げる。「お金にだらしがいない」という単純な道徳的見地でわりきれば、Micawber 氏の魅力の数々が何と無惨に切りすてられてしまうことであろう。

彼の修辞世界は、現実生活の金銭的逼迫と無関係ではない。彼の修辞が想像世界を天翔ける時は、必ずといっていいほど、己れの不遇を語っている。天にみすてられ、希望が消えた時、ことばはとりわけ詩的になる。そして古典の引用が、不遇の身を更に強める。

例えば、金銭的逼迫と血みどろの戦いをしつづけてきた現在の心境を語るに、カトー自殺の場面を引用し、「汝の説くところは巧みなり」(17; Addison, *Cato*, v) されど今は力尽きてすでに戦意なし、とのべる。まるで、あとは自殺しかないと思わせるほどの戦意喪失を、巧みに伝えている。あるいは、Heep の悪事を暴き、無事 Agnes 一家を救ったのはいいが、借金未払いを Heep に訴えられて、身はふたたび投獄の憂き目となる。獄中より手紙を書き、Robert Burns を引用して、今は「鉄鎖と奴隷の辱しめ」(54; Burns, 'Scots, wha Hae') を受ける身であると嘆く。家賃滞納ゆえに差押えをくらいい止むなく引越すはめにおいやられた時、彼は David に急拠手紙をしたためる。Macbeth のセリフにある、毒酒を「押しあてる」という意味の“commended” (*Macbeth*, I, vii, 11) なる語を用いて、「わが口辱に押しあてしこの大杯に一滴の苦渋が欠けているとすれば」(28)、それは Traddles への債務不履行と、一児出生の予想による生活費の膨張であろうと述べて、まさ



に毒杯をあおがぬばかりの心境を表現するのである。

だが、彼の修辞はある特徴的な効果を伴う。それは、己れの惨状をみごとに表現しえた時には、自分のもとより一家の苦しみや悲しみは、不思議と彼の脳裏から消え去るのである。いや、惨状だけではない。債務ですら、証文さえ書いてしまえば、きれいに消えてしまう。David の観察によれば、Micawber 氏は困ったギリギリの時になると、必ず一種の法律用語を抽出して、長い手紙を書き送る。それさえ投函すれば、たいいてい用事は片づくものと思っているらしいのである。

作品中あちこちに配された彼の手紙は、ホテル代支払いに空手形を切らざるをえないこと、家賃滞納による家具一切のあけわたし、借金未払いゆえの債務者獄入り、を悲しいまでに切々と綴っている。ところが手紙を書く前後の彼は、信じられぬほど陽気に、飲み騒いでいるのである。

一つ二つ例をひろってみよう。カンタベリーで再会のよろこびをかわしたあと、David が帰宅してみれば「あとは破滅のみ」(17) との悲嘆きわまりない手紙が届く。心配に胸の潰れる思いでホテルにかけつけたところ、Micawber 氏はロンドン行の馬車に乗って、ニコニコした顔で妻に語りかけ、おまけに胸ポケットからは酒ビンすら顔をのぞかせている。窮地を脱したあとの Micawber 氏の晴れやかな顔を見ると、空手形を切った事実をもち出して彼を責めたてる気になれなれない。一つの極端から他の極端へ自在に移行しうる思考と演技に、何よりも大きな魅力を感じるのである。

逆の場合もある。「近く大いに好転の兆しがある」(27) という彼を迎えて David は小宴を開き、自慢の焼き肉 (“The Devil”) を料理してもらい、ポンチ酒をも作ってもらって、楽しくうちとけた夕べをすごした。これほど陽気で快活な Micawber 氏がいようかと思われるほどに、彼は食らい、飲み、語ったあと、帰りぎわに David に手紙を手渡す。Micawber 夫妻を見送ったあと開いてみれば、何と「完全に倒産」し、「希望は地平線下に沈み」、家賃差押えの対象として家財はおろか、下宿人 Traddles の家財もすべて没収の

対象となったと書いているのである(28)。

この、喜びから絶望へ、絶望から喜びへと瞬時に移行しうることは、Micawber氏の性格の大きな特徴である。それは、手紙を書く前後にみられるだけでなく、彼の生活上の様々な場面にもみられることは、知っての通りである。

例えば、DavidがMicawber氏の家に間借りした時、借金取りがおしよせてくると剃刀自殺の大演技をやったのけたことは既にのべた。債鬼が帰って30分もした頃、Micawber氏は入念に靴をみがきあげ、まるで何事もなかったかのように、鼻歌まじりで外出するのである。また、土曜の夜などは、あとは牢獄行き以外に道はない、といい激しく泣いていたかと思うと、寝しなには家の張出し窓の取付け費用を喜々として計算している。いよいよ行き詰ってKing's Bench Prisonへ赴くはめになった朝は、悄然としていたが、いざ訪ねてみれば、午後にはもう九柱戯に熱中しているのである。

この変わり身のすばやきを、作家は“elasticity”(11)と表現しているが、これこそMicawber氏が妻と共に有している類まれな資質であり、一見滑稽にみえながら、真実のところ、この変り身のすばやさが貧窮におしつぶされてしまうのを防いでいるのである。彼は貧窮の泥沼の中でもがきもがいているが、決して貧窮にのまれてしまうことはない。生きることをあきらめたりはしない。生きることは絶望することよりはるかにむつかしいのだ。絶望にあっては、その機をとらえて零落した人生をうたう詩人となり、債鬼に責めたてられれば一大演技をみせておい払い、そして“Something will turn up.”という強靱な楽天主張を信じ、彼を“desert”せぬ妻に支えられて、どのような貧乏の苦しみをもはねつけている。彼は、いわば、貧窮とたたかう闘士といってよいであろう。

貧乏の辛酸をなめつくしながら、試練と闘うMicawber氏であるからこそ、彼がDavidに贈る忠告には一際真実がこもるのだ。「年収20ポンドで、年支出19ポンド19シリング6ペンスというのなら、これは幸福ってことになる。

ところがだ、年収20ポンドでも、年支出20ポンド、飛んで6ペンスとくると  
だ、これは逆に不幸なことになる」(12)

この忠告が Micawber 氏ならぬ他人の口から発したものであれば、「この  
程度の経済観念しかない」人間として蔑むことも可能であろう。あるいは、  
ここだけをとり出して人生訓とすれば、たちまち陳腐に墮してしまうことも  
また明らかである。Micawber 氏の言葉は、己れの苦闘の人生の中で擲んだ、  
あまりにも明白な真実であるがゆえに、誰にもまねることのできぬ一種独特  
の迫力と壮重さをもつのである。

### 3. 作品中における役割

Micawber 氏については、従来作品の中より彼を単独でとり出し、修辞と  
性格の分析を考察するものが大半を占める<sup>4</sup>。その場合、確かに彼の英文学  
中における喜劇人物としての地位は磐石たるものとなるが、反面、彼と作品  
との関係はきわめて稀薄となる。この作品は、生き方、成功、愛、結婚に  
ついて、さまざまな対照・対立関係を巧みに織りまぜているのが特徴で、し  
たがって、そうした諸関係を念頭に入れず、たとえば主人公の立身にのみ  
焦点をあてて読めば、これはきわめて一面的な理解ということになろう。  
Micawber 氏についても、作品中における対照関係を考慮に入れてみれば、  
彼の人間的スケールがより鮮明になるのではないかと思われるのである。

彼の人生は、David や Traddles、それに形こそ異なるが Heep をも含め  
て、成功物語のそれである。成功とはいっても、異国においてのことであり、  
しかも最後にとってつけたような形のそれであるから、実際は不適當ないい  
方であるかもしれないが、ともかく己れの才能を発揮できる職を手にする物  
語である。ここでは、成功一路の David と、人生の泥沼の中で格闘する  
Micawber 氏との出会いを中心に、Micawber 氏の作品中における役割をさ  
ぐってみたい。便宜上、彼の登場する場面を、まずカンタベリー就職前、つ  
いで Heep 事務所勤務と家庭内の奇妙な不和、そして第三に、Heep 弾劾と

オーストラリア移住に三分し、それぞれにおいて二人の関係がどうなっているかをながめることにする。

二人の最初の出合いは、David が天涯孤独の身となり、しかも労働者階級に身をおとして、立身の夢がついた時である。“No words can express the secret agony of my soul as I sunk into this companionship...” (11) ではじまる、孤独と悲愁が作品の主調音となった時、まさにこれをはねとばすかのように登場するのが Micawber 氏である。

風貌の愛嬌、大袈裟な言葉使い、生の充足をいかんなく伝える朗々たる大音、これらはその場で支配的なペイソスを追い払ってあまりある。ところが Micawber 氏の家に下宿してびっくり。一家の生活と比べれば、David の境遇など悲しむに足りない。悲運の底におちたと思ひこむ David より、もっと隔たる底辺で貧乏とすさまじい格闘をしているのが Micawber 夫妻である。債権者が迫れば剃刃の効用に訴え、差押人が来れば失神して倒れ、David には質屋通いをたのみ、あげくの果ては、悄々と債務者獄へと赴く。

こんな光景を目のあたりにして、David は我身の零落を嘆きつづけることはできない。彼に自尊心が再びまい戻ってくる。この夫妻と David の間に「奇妙な対等の友情」が芽生え、「Micawber 一家とは苦難を通じて完全に結び」(11) つき、「何もかも打明けあう仲」(12) となる。ところがこのような関係にありながら、David が伯母の家に逃れていってからは、Micawber 氏を「貧乏を売り物にしている人間」(17)だと、ややさげすむ態度でながめているのである。

一方、債務者獄の Micawber 氏は、獄内において破産者拘留法改正の嘆願書を作成し、その成功に酔っている。しかし我が事となれば何一つ好転せず、「骸子は投げられた……結果は破滅のみ」(17)と David に書き送っている。彼は娑婆でこそ苦闘すべく運命づけられているものの、欲、偽善、体裁をぬきにした世界においては人々に力を与え人々の共感を得る、何か象徴的な存在に思われてしかたがない。現世のあらゆる虚栄を拒否され、貧苦にあ

えぎながらも、彼の中にもみるのは豊かな人間味、他人への奉仕、そして勇気づける言葉ばかりであるからだ。

次に David と Micawber 氏が興味ある交錯をみせるのは、David が Dora を恋し、次いで結婚するまでの部分 (26-43) である。「他日の雄飛を期して隠忍自重」しているという Micawber 氏は、相変らずの借金地獄にあって、危機的生活を送っている。が、友人の David が恋人のことを思い悩んで食欲もなく仕事も手につかぬと知ると、David の下宿を訪ねてすばらしい晩餐会を挙行し、彼の滅入る気持をふき飛ばす(28)。

婚約に成功し万事が好都合に進んでいる時、伯母の破産が到来し、David は自活という大決心を迫られる。この時、逆に Micawber 氏は「楽土」たるカンタベリーに頭脳職を見つけ、意気揚々、門出の大宴会を開くからと David を招待する(36)。が、David を持ちうけるのはたび重なる不運。恋人の父より、文なし青年との交際は一蹴される。しかし、その父の急死(36)により、Dora との仲には一縷の望みが持続し、努力が実って二人は晴れて結婚する(43)。この時まで Micawber 氏は Heep の事務所に勤めているが、そこでさまざまな奸計・詐欺に手を染めさせられ、家庭生活に重大な亀裂が入るほど、気むつかしい人間になり変っている。

この部分では、二人の人生の順境、逆境がめまぐるしく入れ替わっているが、ともかく Micawber 氏が職らしい職にはじめて従事していることは注目してよく、彼が無為、無責任の輩でないことは確かといえるであろう。

最後に、Heep 弾劾の前後においては、二人の関係は極立った対照をみせる。David が熱愛した Dora は、妻としては物足りなく、彼の失望と彼女の衰弱は日ましのつってゆく(48)。終には死亡(53)。そしてまた、彼が終生尊崇しつづけた Steerforth はヤーマス沖で難破して死亡、これを救助しようと逆巻く海に飛びこんだ Ham もまた溺死する。David にとっては、愛する人々との悲しい別れがつづく場面である。こうした一方で、Micawber 氏とはいうと、彼は Heep の屈辱の軛をたち切り、本来の自分を取戻すため、

David および Traddles と連絡をとり (49)、雇主の悪事暴露に全力を投ずる。卓抜した文才に更に磨きをかけ、美辞を連ね古典を引用し、己れのもてる才幹を十二分に駆使して卑劣漢の弾劾を実行。Heep の魔手に陥る寸前の Agnes を救い、Wickfield 氏あるいは Trotwood 伯母の財産をも救って、さながら Micawber 氏は作品の主人公になり代った感じすら与える。

ところが、この一大演技を見事にはたした彼は、修辭の天空より急落下し、我身は文なし、近き将来には民事裁判刑務所入り、あとは貧苦とさんざんな目に合うことを覚悟していると語る。そして、彼のなせし行為はすべて「イギリスのため、祖国のため、美しき女性のため」と、John Braham の詩句を引いて結びとし、一大巻物であるこの弾劾文を伯母に感慨深そうに手渡すと、家族のもとへとんで帰るのである。

これだけの才能をもち、主人公になり代るほどの感動的な働きをしながらも、Micawber 氏は自分の運命を好転させることは何一つできない。しかし本源的な自分を決して売り渡さず、貧困と人生の苦勞に弄ばれることを潔よく引受ける彼は、人生をもっと深いレベルで我々に教えてくれる人物である。

David と Micawber 氏の人生とを比べてみれば、前者のそれは優等生的な克己の人生であるのに対して、後者のそれは貧困と借金の責苦に追いまわされ、もがき、苦しみ、投獄の憂き目に会う、人生との闘いそのものである。David にとって、万事は好転し、やがて作家として成功し、家庭愛においても至福となり、いわば至高にいたるアポロ的人生を歩むのに対して、Micawber 氏の場合は、徹底的な敗北を戦いぬくのである。既成の枠に閉じこめられず、因果律に押しつけられず、絶望の中から超人的に弾ね上り、破滅に頻しながらも友情に篤く、そして一度は獄内で債務者法改正の請願書作成に、そして次には Heep の卑劣な権益取得暴露において、己れにはビター文の利益にもならぬのに、あるべき姿を求めて己れのすべてを投じるのである。我々は、いわば、デュオニソス的な人生の縮図を彼の中に見るのである。

Micawber 氏はこの人生の苦闘において、「何かいいことがあらわれる」と

の楽天観を抱いて生きる。苦しみを忘れ、苦しみをよろこびにかえる、この楽天観こそは、Micawber 氏の特権であり、これが人生にいかにか尊いものであるかを教えてもくれるのである。そして、これは B. Schilling の指摘<sup>5</sup>であるが、彼のことばに *Mark* (14:36), *Luke* (22:42), *Job* (42:6) の引用が加わり、ゲッセマネの苦杯、及び塵芥の中で悔悟する人間の姿を連想させる時<sup>6</sup>、彼の修辞はひときわ壮厳さを加える。これは Micawber 氏の闘いが単に一個人の闘いではなく、人間存在の根本を問う闘いの様相をすら呈するといえるのではあるまいか。我々は Micawber 氏の闘いの中に、苦闘のさ中において維持しつづける本源的な人間性の美しさを見出すのである。だからこそ、Micawber 氏の登場するところ、さわやかな風が吹きわたり、悲愁悲嘆の中において、不思議に爽快さがわきおこるのである。滑稽にみえる彼の楽天観の中に、貧困と悲しみをとびこえる、勇気と希望と生きる力の根源を見るのである。

## 注

- 1 Charles Dickens, *David Copperfield* (Oxford Illustrated Dickens) Oxford University Press, 1972, Ch. 35. 以下、引用はこの版を用い、( ) に章番号を示す。Micawber 氏の言辞の日本語訳は、中野好夫訳『デイヴィッド・コパフィールド』(全三巻、東京、新潮社、1963) を利用した。
- 2 Bernard N. Schilling, "Mr. Micawber's Difficulties," in *The Comic Spirit: Bocaccio to Thomas Mann* (Detroit: Wayne State University Press, 1965), p. 102.
- 3 Alfred B. Harbage, *A Kind of Power: The Shakespeare-Dickens Analogy* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1975), p. 48.
- 4 Micawber 氏を正面からとりあげた論文は非常に少ない。

田辺昌美「MR. MICAWBER 考」『山本忠雄先生学士院受賞記念英語英文学研究』(東京、研究社、1957), pp. 115-124; 河井迪男「Micawber 氏の英語について」梶井・田辺編『ディケンズの文学と言語』(東京、三省堂、1972), pp. 139-152; 川本静子「Micawber 氏のイノセンス」『英語青年』120巻 (May 1974), pp. 52-54; 小池滋「因果帝国の遺跡にて」『ディケンズ——19世紀信号手』(東京、冬樹社、1979) pp. 91-102. 日本人による論考では、誇張は多いが、田辺先生のものが

Micawber 像をうまく伝えている。

欧文献では次の4点がすぐれている。Bernard N. Schilling, "Mr. Micawber's Difficulties," "Mr. Micawber's Abilities," in *The Comic Spirit*, pp. 98-123, 124-144; William Oddie, "Mr. Micawber and the Redefinition of Experience," *Dickensian*, 63 (1967), pp. 100-110; William F. Hall, "Caricature in Dickens and James," *University of Toronto Quarterly*, 39 (1970), pp. 242-257.

とりわけ Schilling の両論文は、失敗の人生を喜劇として演じる Mr. Micawber を、性格、多芸多才、柔難性、適応性の面から鮮かにとらえてこれを分析し、殊に Mr. Micawber の詩的表現にいたっては、修辭、引用、ラテン語派生の抽象語句、イメージリー、比喩にわたって詳しく吟味し、困窮との闘いが彼にいかにか誇りと詩的よろこびを与えているかを指摘している。また、Mrs. Micawber の論理と夫への忠誠に対しては、彼女のすばらしい一本調子とその限界を面白くかつ適切にとらえており、Micawber 夫妻像においては、いまのところ Schilling 論文の右に出るものはない。

5 Schilling, *ibid.*, p. 113.

6 "The canker is in the flower. The cup is bitter to the brim. The worm is at his work." (*David Copperfield*, 49); "...a work of supererogation to add, that dust and ashes are for ever scattered on the head of Wilkins Micawber." (*ibid.*, 28)



Synopsis

Significance of Mr. Micawber in *David Copperfield*

Takao Saijo

There are few characters in English novels so comic and yet so attractive as Mr. Micawber. Whenever we meet him, he is wallowing in the slough of debts and difficulties, and yet the next moment, he, with his characteristic elasticity, soars up into the clouds of rhetoric and optimism, forgetting all traces of his sordid life. His metaphorical world becomes very rich and his grandiose words carry special weight and splendor when he laments his ill-fate and the situation he is newly thrown into. In dejection, left at the mercy of ill-fate, he is most powerful.

Mr. Micawber as literary and theatrical artist is wonderfully discussed by Bernard N. Schilling. In many cases, critics take Mr. Micawber simply as a comic person in many ridiculous situations in life, and rarely go into the complexity of his character. Schilling's Micawber is delightful, but if something is missing in his superb rendering of this character, it is the role Mr. Micawber plays in *David Copperfield*.

Except in his weakness in making debts and writing promissory notes rather too frequently, he is meticulous, ready to help others, unflinching in friendship, and rejoices in the world of words. He is by no means a despicable man. Rather he has many meritorious qualities we sanctify in life. We trust him at heart, and consequently his presence

in the novel gives us pleasure and hope in the face of poverty and misery.

Mr. Micawber engages himself in a variety of professions, but succeeds in none of them, nor does he give us a sense of what he actually does for a living. This means that he is a lone individual entity. Life is a struggle, and he is the quintessential representative of it, and, I should say, an epitome of all mankind. He makes use of adversity, and in utter dejection, turns out a great poet of life. We take him as a champion of mankind, struggling for some affirmation of life in the midst of dire poverty and ill-fate.

To see Mr. Micawber this way is relevant, when we put him side by side with David. To me, the whole structure of the novel seems a wonderful mixture of parallel stories, antitheses, and contrasts. To focus on the progress of David alone, for example, is to cut off all other strands that are placed to see it in parallel or in contrast.

David's way of life is somewhat Apollonian, walking along a straight way to success and happiness. His sufferings at Murdstone and Grinby's are still on a surface level, compared with the Micawbers' struggles with the harsh realities of life. By living with them, David gradually regains his sense of self-respect. Micawber's struggle is far deeper than that of David. His is the endless struggle of failure, and yet in his disinterested services to others or in giving his all to what ought to be, he fights it out, even if it turns out to be a failure. In him we see a Dionysian way of life, in quest of collective good. And when such Biblical words as "the cup is bitter to the brim," or "dust and ashes are for ever on the head..." come to his lips, his rhetoric adds a special dignity. His struggle is not only an individual one,

but a fundamental struggle everyone on earth is forced to meet in life. This is why the Micawber chapters are so entertaining, and at the same time so full of vitality, hope and encouragement.